

西小だより 春夏秋冬あっちこち

第54号
平成30年3月2日
桐生市小曾根町1-9
桐生市立西小学校

有終の美を飾る

学年末が近づいてきました。卒業式まであと3週間、土日はをさんだ次の日は修了式です。3学期の始業式で、こんな話をしました。

前略・・・(ニューイヤー・箱根)駅伝に出場した選手たちは、また来季に向けて、オリンピックやパラリンピックに出場する選手たちも、競技が始まるその日に向けて、積み重ねてきた練習を振り返りながら、今も毎日、一生懸命トレーニングに励み、準備を整えています(オリンピックは終了しましたが)。児童の皆さんも、この3学期、2学期までに学んできたことを振り返り、自分が今やらなくてはいけないことは何かを、しっかり見極めながら過ごしてほしいと思います。“Challenge to Smile”今年度が終わる3月末に「ああ、今学期、今年度しっかりやれたな」と納得できる、充実した3学期にしましょう。

「有終の美を飾る」の意味は、最後までやり通し立派な成果をあげることです。わずか3週間、されど3週間。平成29年度を「みんな笑顔」で終われるように、強い意志を持ち、時間を大事に過ごしてほしいと思います。



珠算教室 3年

2月20日(火)

算盤の基礎を、珠算塾の佐々木先生に指導していただきました。熟練すれば、エクセルなど足元にも及ばず、電卓よりも速いこと確実です。暗算力もつきます。ガンバレ3年生。

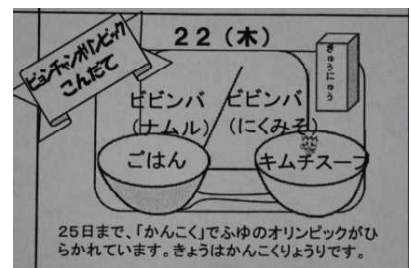


平昌オリンピック献立 2/22(木)

25日に閉幕しましたが、日本選手の頑張りで大いに楽しみました。ただ、韓国と日本は時差がないのに、夜遅くなってから行われる競技がいくつもあり、観戦するのが大変でした。選手は、調整に苦労したのではないかと思います。深夜に終了して、観客はどんな手段を使って帰宅したのでしょうか。

2年後には、夏季大会が日本の東京で開かれます。夏休み中ですから、もしかすると競技会場に出かけてリアルタイムで観戦という子もいるかもしれませんね。そう思うと、なおさら自国の子供たちが無理せず見られる時間帯に競技してほしいと思いますが、巨額のTV放映権料などのことを考えると難しいのでしょうか。いずれにしても、出場を目指す選手たちは、今日も自分と戦い、トレーニングに励んでいるはず。陰ながら応援しています。

3月9日には、パラリンピックが開幕します。こちらアスリートたちの熱き戦いに期待しています。



25日まで、「かんこく」でふゆのオリンピックがひらかれています。きょうはかんこくりょうりです。

AI どう変わる 学校教育

先日、元通産官僚で経済企画庁長官も務めた、堺屋太一さんが書いた『平成三十年への警告』[平成16年(2004年)発行 朝日文庫]を読み返してみました。この本は『平成三十年 何もなかった日本』という、同じく堺屋さん自身の作である近未来予測小説を受けて、2001年1月～2002年9月に『週間朝日』に連載された文章をまとめたものです。未来を予測することは楽しいことでもあり、恐いことでもあります。21世紀元年の2001年の段階で、今後、社会の主役はインターネットとなり、IT化が一気に進むだろうと書かれていました。確かに、現在そうなっています。しかし、わずか十数年で、コンピュータが、これほど急激に進歩するとは予想していなかったようです。

ディープラーニングの手法によって、人工知能(AI)は、予測をはるかに越え、ちょっと前まで、当分の間は人間に勝てないであろうと言われていた「囲碁」の世界でも、人間を凌駕するようになっていきます。この先、10年～15年もすれば、自動車はその名の通り自動運転に、お店に入ればロボットのお出迎えが当たり前になるのでしょうか。財布は、過去の遺物となり、決済のほとんどは電子端末でというキャッシュレスの時代は、すぐ近くにまでやってきていると言います。ご祝儀やお年玉などは、どうやって渡すことになるのでしょうか。

そんな中で、学校や教師は、どう変わっていくのでしょうか。コンピュータは、明確な解答があるものなら、あらゆる分野のあらゆるレベルの問題を用意し、瞬時に答えを示すことができます。解答から判断して、その子のレベルに合った問題を何種類も用意するのも朝飯前です。つまり、優秀なAI搭載ロボットがあれば、知識やある程度の技能の面では、人間以上の働きが可能でしょう。

しかし、学校教育は、教師と児童生徒という対人関係が基盤にあります。授業では、子供の素朴なつぶやきや突拍子もないような発想が起点となって、次から次へと意見が出て、考えが深まったり、多角的・多面的な見方ができるようになったりすることがよくあります。授業が上手と言われる教師は、子供たちの意見や考えをうまく引き出したり、つないだりすることに長けています。常に雰囲気を感じ取り、空気を読んでいます。学ぶこと、教えること的前提には、人間関係があります。だからこそ、表情や態度を見ながら、或いは、教室に漂う気配を感じながら、目指す方向、ねらいへ向けて授業を進めていくことができるのです。

機械に顔認証はできても、その表情の奥にあるものを読み取ったり、一人ひとりが背負っている生活や人間模様を感じ取ったり、嗅ぎ分けたりすることができるようになるのでしょうか。その人が醸し出す雰囲気や機微を感じ取る、人生の行間を読むことができるようになるのでしょうか。感性は人によって異なりますし、好みの問題で答えが違うものもあります。世の中には正解が出せない問題がいくらかでも存在します。いくらコンピュータが進歩し、IT化が進んでも、やはりチョークとトークの扱いが上手でなくては、教師は務まらないように思えます。

ところが、やがて人工知能が人類の能力を超える「シンギュラリティ」の時が来ると言われています。本当に、あらゆる点でコンピュータが人間を上回ってしまうのでしょうか。

私たち人類には、人として積み重ねた知恵や熟練した技能があります。想像力や直感力、特に勘をはたらかせることは、本物の頭脳にしかできないようにも思えます。自分で自分を進化させる汎用人工知能は、それをも超えるのでしょうか。

この先、じわじわとAIが生活に入り込み、何でもコンピュータ任せの暮らしに慣れた頃、人の好みや感性などは遠くへ追いやられ、状況や立場などによって解釈が分かれるような問題でも、人工知能が唯一絶対の解答を決める。人間不在、人間無視の暴走を始めるかもしれません。そうなる前に、自分の頭脳で判断し、コンピュータを制御できる人を育てることが、ますます重要な学校の役割になるのだと思います。

